

『山男の四月』

宮沢賢治

山男は、金いろの眼を皿のようにし、せなかをかかめて、にしね山のひのき林のなかを、兎をねらってあるいていました。

ところが、兎はとれないで、山鳥がとれたのです。

それは山鳥が、びっくりして飛びあがるとこへ、山男が両手をちぢめて、鉄砲だまのようにからだを投げつけたものですから、山鳥はほんぶん潰れてしまいました。

山男は顔をまっ赤にし、大きな口をにやにやまげてよろこんで、そのぐったり首を垂れた山鳥を、ぶらぶら振りまわしながら森から出てきました。

そして日あたりのいい南向きのかれ芝の上に、いきなり獲物を投げだして、ばさばさの赤い髪毛を指でかきまわしながら、肩を円くしてごろりと寝ころびました。

どこかで小鳥もチツチツと啼き、かれ草のところどころに

やさしく咲いたむらさきいろのかたくりの花もゆれました。

山男は仰向けになって、碧いああおい空をながめました。お日さまは赤と黄金でぶちぶちのやまなしのよう、かれくさのいいおいがそこらを流れ、すぐうしろの山脈では、雪がこんこんと白い後光をだしているのです。

（飴というものはうまいものだ。天道は飴をうんとこさえているが、なかなかおれにはくれない。）

山男がこんなことをぼんやり考えていますと、その澄み切った碧いそらをふわふわうるんだ雲が、あてもなく東の方へ飛んで行きました。そこで山男は、のどの遠くの方を、ごろごろならしながら、また考えました。

（ぜんたい雲というものは、風のぐあいでも、行ったり来たりぼかっと無くなってみたり、俄かにまたでてきたりするもんだ。そこで雲助とこういうのだ。）

そのとき山男は、なんだかむやみに足とあたまが軽くなって、逆さまに空気のなかにうかぶような、へんな気もちになりました。もう山男こそ雲助のように、風にながされるのか、ひとりで飛ぶのか、どこというあてもなく、ぶらぶらあるいていたのです。

（抜粋）